

創世記一章の創造の日の解釈に関する一考察

西 満

創世記の最初の数章には、唯一の神が全世界を創造され、創造の冠として人間をお造りになった記事が記されている。ルターはそれを「まことに全聖書の基礎をなす部分である」と言った。また、F・シェーファーも「これらの章は聖書のなかで最も大切なものである」と記している^①。これらの章句を通して、古来、数多くの人々が、正しい神観、世界観、人間観を持つように導かれてきた。

しかし、自然科学の発達に伴い、創世記の創造の記事の解釈をめぐって多くの論争がひき起されてきた。M・J・エリクソンは次のように言う。「二十世紀初頭に展開されたモダニスト・ファンダメンタリスト論争における問題は、進化論と創造論というスケールの大きなものであった。これに対して、今日福音派において問題とされていることは、漸進的創造論 (progressive creationism) とこの地球は僅か数千年の歴史をもつという見解との間の内部的論争であるように思われる。」この小論において取扱う主題は、この福音派の内部論争ともなっている創造の日の解釈についてである。

エリクソンは、その論争を五つの類型に分類する。(一)断絶説 (Gap theory) (二)洪水説 (Flood theory) (三)理想的時点説 (Ideal-time theory) (四)時代一日説 (Age-day theory) (五)図式的日説または文字的枠組説 (pictorial-day literary-framework theory)。他方、H・ブロッシェは、(一)再建設 (The reconstruction theory) (二)調和型解釈 (The concordist interpretation) (三)字義的解釈 (The literal interpretation) (四)文字的解釈 (The literary interpretation) に分ける^②。

これらの解釈の立場は、実際には互いに入り組んでおり、完全な類型化は難しい^④。また、どの解釈を採用にしても、これが決定的に正しいというものはまだ見出されていない^⑤。また、どの説を採用にしろ、現代自然科学の成果の影響を——積極的な意味でも、あるいは消極的な意味においても——受けていない説はない。換言すれば、今日、自然科学の学説を全く無視して、創世記の創造の日の解釈を論じることができない時代になってきている。また全体的に言えば、これらの解釈は、エリクソンが記すように、地球と生物の創造を漸進的なものと理解するか、六日間の中になされたものと理解するのかの二派に分けることができるだろう。(進化論の問題は、本論では論議の対象としない。) 小論においては、前記二者の類型を参照しつつ、次のように解釈の立場を分類して、限られた頁の中で論じてゆくことにする。

一、字義的解釈 (一日二四時間、六日間創造説)

創造の日にに関して、古来いくつかの解釈が存在したとは言え、教会は伝統的に創造の日が普通の一日であると考えた。宗教改革者たちは確かにこの立場を保ったし、多くのキリスト者はこのことに疑いを挟むことをしなかった。また、十九世紀の偉大な聖書注解者C・F・カイル、今世紀では、F・ピーパー、J・ミューラー、H・C・リユボ

ルド、L・ベルコフ、H・ヘックゼマ、J・デイヴィス等がこの立場を採る。E・J・ヤングも多少のニュアンスの相違はあるが、字義的解釈の立場を採る。また洪水地質学の立場を主唱するH・モーリス、J・ホイットクウム等もこの説の強力な唱道者である。^⑥

創世記一章をごく自然に読むならば、神は天と地、およびその中にあるすべてのものを、文字通り六日間で創造されたようにとれる。また創造は記された順序通りなされたのであって、人工的に配列されたものではない。第一日に太陽がないのに光があったという記事は、神の全能を知る者にとっては何の矛盾もない。^⑦ また字義的解釈の唱道者は、本文に記された記事には象徴的な意味はなく、字義通り解釈すべきであることを強調する。このことは出エジプト記二〇章一節に記された十戒の安息日の項の解釈についてもいうことができる。ヤングはこのことを主張するにあたって、アールダースの論を引用する。

「出エジプト二〇章一節において、神の行為は、人間にとってのパターンとして示されている。このことは、神の行為には、人間の従うべき現実があったことを前提としている。もし神ご自身が、実際に六日間お働きにならなかったのであるなら、どうして、人間が六日間働く義務があるとされたのであろうか。^⑧」

以上のようにこの立場に立つ者は、本文のことを出来得る限り、字義的に解釈しようと努める。しかし、この見解に対して積義的な面からいくつかの反論がなされる。(一)「日」(ヨーム)の解釈について、(二)聖書の記者が史料編集を行なう場合、しばしば年代順よりも、主題的に行なう場合が多い。(三)創造時における神の摂理による作用様式(modus operandi)は、今日と全く違ったものであるということを書聖書は主張しているかどうか。

こういった反論は、個々の解釈の中で紹介する予定なので、今は記すことはしない。ここではむしろ、一日二四時間、六日間創造説を唱える者たちが直面する現代自然科学との関わりで、特に、クリエーション・リサーチ・センターを中心とする学者たちが主張する二つの説を紹介しておきたい。

A 成人創造 (歴史の装いを凝らした創造)

神が始めに万物を創造された時、それを何千年あるいは何万年も経過した如く創造されたのである。H・モーリスは次のように言う。

「最も簡単な原子か何かを神が実際にお造りになる場合、そうした原子や他の被造物は、必ず何らかの時間的経過を示すような外見を装っている。そのものに固有の時間的経過の装いをもたないような真の創造といったものはありえない。それでも、新たに創造されたものを、ある種の進化の歴史から解釈することは可能であろう。そして、神が時間的経過を装わせて原子物質を創造できるなら、換言すれば神が存在するなら、ご自分の真実の特質に従って、神が十分に成長した姿の全宇宙を創造できない理由があるか。……歴史の装いを凝らした創造という教えが間違いだとしたら、主イエス・キリストの奇蹟は起りえなかった。たとえば、五千人の人たちを養ったパンと魚も、種や卵から自然に時間をかけてでき上がったものではなく、瞬間的に創造されたものである。天地創造についてもこれと同じことが言えるはずである。」^⑨

B 洪水地質学 六日間創造説にとって最も大きな問題の一つは、現代地質学との関わりであろう。たとえば火成岩、堆積岩、変成岩等の岩石とその地層の存在、大陸の移動、造山運動、多くの時代をあらわす化石を含んでいる地層、放射性元素による測定等。こういったことから、今世紀の始め頃、保守派の多くは六日間創造説を放棄し、次に延べる断絶説を受け入れた。これに対して、セブンスデー・アドベンチストのG・M・プライスは著『The New Geology (1923)』の中で、今日見られる地質形成の大部分はノアの洪水の結果であると主張した。プライスの学説は保守派のある学者たちに大きな影響を与えた。特にB・ネルソンの Deluge Story in Stone やコンコーディア

神学校の A・M・レーウィンケルの The Flood (1951)、J・ホイットクウム、H・モーリスの The Genesis Flood (1961) はプライスの学説に多くを負っている。

洪水地質学は、現代の標準的地質学の中で当然のこととして教えられているライエルの斉一説 (Uniformitarianism) に対するアンチテーゼとして現われたもので、新激変説 (Neocatastrophism) とも呼ばれる。斉一説によれば、すべての地質現象は、過去も現在も同じ経過と営力で起こるとされる (現在は過去を知る鍵である)。これに対して、洪水地質学は、地質の変化の過程が現代も過去も全く同一であったとする理由はどこにもない。むしろそれは、ノアの洪水の時に大激変したものであると主張する^⑩。今日の地質学者が地質年代の基礎としているものが進化論であり、その進化論が今日何の証明もされていない仮説であり、非聖書的である以上、現代の斉一説の上に建て上げられている地質学は間違っている、と主張する。

要するに、洪水地質学は創造の日に関する字義的解釈の立場に対して、新激変説に立つ仮説 (地質学の一つの立場) をもって擁護したということが出来る。しかし、字義的解釈の立場に立ったはずの洪水地質学は、創世五、十一章やその他の系図の解釈においては、字義的解釈に縛られない解釈方法を採用し、ノアの洪水の年代を前八千年、または、それ以前とせざるを得ない自己矛盾に陥ることになる^⑪。また、聖書解釈においてもシンメトリの存在を認め、数字を象徴的なものとする。

二、断絶説 (再建説)

J・プライス以前に激変説を唱道した学者に、フランスのキュヴィエがいる。キュヴィエは比較解剖学を創始し、背推動物古生物学を確立した人である。キュヴィエはその著『化石骨の研究』の序論で激変説を提唱した^⑫。キュヴィエはこの地上は何回も繰返し急激な大変動が起こり、大陸は幾度となく海底になったと考えた。キュヴィエは、ノアの洪水を激変説の中で説明した。すなわち、聖書に記されている大洪水は最後の激変であった。また彼は、自然の現象を激変説で説明した。一例を挙げると、水は零度で氷になる。それは突然になるのであって、その中間はない。だから変化は漸進的なものではなく、突然変化をするのである。この考えに反対するものとしてできたのが斉一説—進化説である。

このキュヴィエの激変説は、多くの人たちに少なからぬ影響を与えた。まず、イギリスのパーキンソンは Organic Remains of a Former World (1804—II) を著わし、その中で、キュヴィエの激変説を聖書の創造論と複合せ、創世記の創造の日を長い期間であるとした。パーキンソンのこの激変説に立った地質学を調和させる試みは、スコットランドの T・チャルマーズに刺激を与えた。チャルマーズは、六日間は普通の日であるとしながらも、キュヴィエの激変説を聖書の創造の枠組の中に入れ、説明しようと試みた^⑬。彼は、一節と三節の間には大激変、断絶があり、そこに途方もなく長い期間を見出すとするのである。六日間の創造は再創造であり、それ故に「再建説」とも呼ばれる。

この考えは、G・H・ペンバーによって、その著 Earth's Earliest Ages and Their connection with Modern Spiritualism and Theosophy の中で念入りに仕上げられ、一九一七年には、スコフィールド・レファレンス・バイブルの脚注の中に取り入れられることによって、ファンダメンタリストの間に広まった。(最近のスコフィールド・バイブルではこの説が削除されている) しかし最近でも、カナダの科学者 A・カスタースは Without Form and Void—A Study of the Meaning of Genesis 1, 2. (1970) と題する著書の中で、断絶説の弁護を行っており、それ以前

にも地質学者 L・A・ハイリーが Science and Truth の中で、断絶説の擁護をなしている。¹⁵⁾

断絶説も個々の主張に多少の相違はあるが、大体の主張点は次のようなものである。

- 一、神は創世記一章一節に記されているように、初め完全な世界を創造された。
- 二、神の国エデンは宝石に満ち、そこに神の宮が存在し、天使ルシファーは、神礼拝を司っていた。そしてこの世界の支配はルシファーの手にゆだねられていた。
- 三、このように権力を手にしたルシファーは心に高慢を起し、自ら神になろうと企んだ結果、ルシファーとその仲間には地に落とされ、審きを受けた。
- 四、途方もないほど長い期間、地はそのまま放置された。その期間に多くの地質の変動と形成が行われた。多くの恐竜の骨や化石が巨大な墓場のように存在することは、罪に対する審きが地上において行われたことを示すものである。

五、前四千年頃、この世界は文字通り六日間の中に、再創造された。

したがって、創世記一章には、最初の創造（一節）、審きと破滅（二節）、再創造（三節以下）とが記されていることになる。先に述べたように、この説は、地質学が要求する地球の形成に関する長い期間と調和させるために、創世記一章二節に非常に長い期間を与え、その期間にすべての地質変化が生じたと考えるのである。スコフィールドは次のように記す。「もろもろの化石は大古の創造に移す。そうすることによって科学と創世記の天地創造説の間には矛盾がなくなる。」ペンバーは次のように論証する。ヘブル語の「アース」は、創造を意味するのではなく、再創造または作り変える、の意味をもっている。原初の創造は創造されたものであるが、六日間の出来事は造られたものであって、創造されたのではない。ヘブル語の「トーフ・ヴァボフ」（一・二）は、かつて良かったものが、今は

荒廃した状態にあることのみを意味している。トーフ・ヴァボフの用語は「神の怒りが降り注いでいる」ことを表わしているのであり、一章二節の「ハエター」は、to be made または to become と記すべきである。¹⁶⁾ さらに、ペンバーは次のように主張する。

このような意味の方が遥かに文脈に適っている。それゆえ私たちはこの方法を採用し、この句を「地は荒廃し、何もなくなった（空しくなった）」と訳す。さらにイザヤ四十五章一八によれば、神は世界を形のないもの（トーフ）に創造せず、とあるから、創一章二節は神によるこの地の審きの状態を意味しているのである。またこの間に幾時代もの長い年月が過ぎ行き、そして、この期間に地殻の層が次第に形成されていったのであろう。であるから、聖書に対する地質学者の攻撃は的をはずれており、空をうっているようなものである。第一節と第二節の間にはいかなる長期間をも置くことができる。繰返して言うが、聖書には地質の形成に関する靈感を受けた記事が記されていないのであるから、地質学が主張するような順に、地質が形成されたと考えても一向差し支えないのである。¹⁷⁾

断絶―再建説は、かつて多くの人々によって受け入れられていたが、今日では以前ほどではない。しかし現在でも、H・シーセン、J・バクスター、H・リンゼイ、E・ザウワー等はこの立場を保持する。¹⁸⁾ わが国でも、日本伝道隊の聖者 B・バックストン、P・ウィルクス、笹尾鉄三郎等はこの立場を保持した。笹尾は次のように記す。「一節と二節との間には幾万年もあるべし。一節の天地は美はしかりならん。然ど天使の墮落により、二節の如く地は頽れ果てて暗黒となれり。墮落せる人間の靈魂も亦斯くの如し」¹⁹⁾

断絶説は、多くの長所をもっている。悪の起源、サタンの墮落、地質学とある調和等。しかし、いくつかの大きな問題点を持つ。その第一は、教会の伝統的解釈は六日間が最初の創造であるとしてきたし、聖書全体もこの伝統的解釈を支持している。ラムの言葉を借りるならば、「断絶説は聖書の中で最も偉大な章句の一つに奇妙な解釈をほどこ

してしまつた²⁰。第二に、太陽、月、星が第四日目に創造(再建)されたということは、この解釈に大きな困難を与える。これは日一時代説にとつても同様であるが。第三に、最初の創造を「形がなく、何もなかった」状態にしてしまふほどの巨大な大激変、天変地異を第二節の短い節で説明してしまつているのも信じ難いことである。(ノアの洪水は第三章も用いている!)使徒ペテロが「当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました」と記し、イエスが話された洪水による終末もノアの洪水だけであつた。(二節の激変をルシファアの洪水と呼ぶ。)第四に、断絶説によれば、イザヤ書一四章二一―一五節エゼキエル書二八章二一―一九節はサタンの墮落を暗示し、エレミヤ書四章二一―二六節、イザヤ書二四章一節、四五章一八節などを、サタンの墮落の結果、大地が地殻の大激変をこうむつたことを証言する箇所として用いる。しかし、サタンが墮落した結果、原初の創造が罰を受けたと明言する聖句は、どこにも見あたらない。

三、長期間説 日一時代説

断絶説が、地質学者が要求する長い年代を創世一章一―二の中に入れてしまふのに対して、長期間説は、その長い年代を六日間の中に読みこもうとする。長期間説の芽は前述したように、キュヴィエの影響を受けたパーキンソンその他に見ることができ、ライエルの火成論―斉一説が一般に受け入れられるようになる、さらに多くの学者によつて支持されるようになった。キュヴィエの激変説がウエルナーの水成論²¹を土台にして、ライエルの斉一説はハットンの火成論を土台としている。J・ハットンは、地球の現在の姿は、非常に長い時間にわたる永続的な変化の結果できたものだと考ええた。したがつて、過去の地質時代の出来事は、現在の自然の状態や自然の作用を注意深く観察することによつて、明らかにされると考える。彼は、種々の堆積岩を固定させたものは、地下の熱と堆積物にかかる圧力であり、海底堆積岩を海底から隆起させるものは、地下の熱の膨張力であるとした。この隆起の過程で地殻に割目ができ、この割目に沿つて溶融した岩石や鉍液が侵入する。溶融物質は累積した地層間に拡がるか、地殻の割目を充填し、地表には出ない。そのために、溶融物質は地下深所で巨大な圧力を受けて固化する。カコウ岩や斑岩はこうしてできる。ハットンは、岩石を成因によつて水成岩、火山岩、深成岩に区分した。ハットンのこの見解は、火成説といわれ、ライエルによつて受け継がれ、十九世紀から二十世紀にかけて地質学の大勢となつた。重要なことは、ハットンが、過去の地質現象も現在の自然法則にしたがうことを主張したことである(斉一説)。その考えを継承し、大成し、普遍化させたのがライエルであつた。ついでながら、ダーウィンはライエルの「地質学原理」を持つて航海に出たといわれる。そしてダーウィンは、この火成説とヘーゲルの哲学の影響を受けて、「種の起源」を書いた。

ライエルは、地球上の動植物が現在の形になるまでには、二億四千万年かかつたであろうと推定したが、今日では、岩石の放射性物質の崩壊のプロセスを研究することによつて、地球の年代を数十億年と考えるようになった。

この火成説は、十九世紀の北米のクリスチャン地質学者にも影響を与え、B・シリマン、J・デーナ、A・グヨット、W・ドーンソンは、長期間説の支持者であつた。二十世紀に入ると、多くの指導的な地質学者がノン・クリスチャンであつたため、聖書の記事と科学を調和させようとする試みに興味を示さなくなつた(宗教史学派の影響も多分にある)。しかし、福音的クリスチャン科学者の中に、この考えを支持している人たちが多くいる。D・ヤングはその一人である。

十九世紀から二十世紀にかけて、多くの聖書注解者、神学者も長期間説を支持するようになった。それらは、F・

デリッチ、J・ランゲ、T・ルイス、A・マクラレン、C・ホッジ、J・オア、^②O・バズウェル、W・カイザー、M・エリクソン、G・アーチャー、J・ストットなどである。確かに、D・ヤングが記するように、「断絶説が幾千もの支持者を得たとすれば、長時間説は幾万もの唱道者を得たのである。」

長時間説にも、その内容には幾つかの型がある。(1)日一時代説(時代一日説)。これは一日を地質学的時代と考え、地質学との調和を計ろうとするもの。(2)断続的長時間説。日は普通の日であるが、日と日の間に長い時代があったとする。^③(3)一日が長期間であると認めるが、日一時代説といった特定の説を採らない。^④

長時間説が、聖書の釈義から主張する点は次のようなものである。

(1) 日を表わす用語「ヨーム」は、旧約聖書に一四八〇回以上用いられ、欽定訳では五十以上の言葉に訳され、邦訳でも二十近い言葉に訳されている。その中には期間、代、世、時代といった訳語が含まれている(ダニエル二・四四、四・三四(三一)、五・一一)。また、主の日、御怒りの日(アモス五・一八、ヨブ二〇・二八)などのように終末論的性格をもつ日、特別な事柄によって性格づけられる場合もあり、「天と地が創造されたとき(ヨーム)」(創世二・四)のように六日間の創造を単数のヨームで指し示す場合もある。このようにヨームは必ずしも、二十四時間の一日を表わしていない。

(2) 第七日はまだ終っていないという指摘。その理由として、第七日の後には「夕があり朝があった」という限定句が付されていない。また、ヘブル書の記者は、神の安息にはいること(四・一一)について語っている。その中で、三十四節で、この神の安息にはいることを、創造のみ業の終結を第七日の安息に結びつけている。そして、この神の安息に神の民がはいることは、救いの完成を含めた終末論的視野からとらえられている(九節以下)。このことは、創造の後の全歴史が、第七日の安息の性格の下に、また、神の祝福と聖別の下におかれていることを示し

ている。このように、第七日が長い期間を含むものであるならば、他の日も長期間であったと考えられる。^⑤

(3) 二章の創造の記事との比較。二章の記事によれば、第六日に生じた事柄は大体以下の通りである。①陸上動物の創造。②アダムの創造。③エデンの園を造る。④すべての動物がアダムの前に連れて来られ、名が付けられた。⑤神はアダムに深い眠りを与え、彼のあばら骨をとって女を造り上げた。これだけの出来事すべてが、第六日の十二時間に行うことが果たして出来るだろうか。しかも、創一27はアダムもエバも創造の日の最後の段階で創造されたことを述べているのである。これは明らかに「日」が不特定の期間であることを表わしている。^⑥

長時間説は、今日多くの学者の支持を受けているにもかかわらず、問題がないわけではない。最も大きな問題の一つは、太陽が四日目に創造されていることである。日一時代説のように、一日の期間が数十万年―数十万年の長さになればするほど、困難性は増大する。この困難を解決するために、この説の唱道者たちは、太陽、日、星は四日目に創造されたのではなく、第四日目まで地球を覆っていた厚い雲が取り除かれたのであると主張する。しかしこれは、苦しいこじつけ的な解釈であるという批判を免れない。M・G・クラインは、この点について反論し、九節の大陸が水の下から現われるという記事に見られるように、著者モーセは、そのような場合のもっと正しい表現法を知っていたはずであるという。ついでながら、一六節の「造られた」(アースー)は、七節で大空を、一一、一二節で「実」について、二五節で「すべてののはうもの」、二六節で「人」を、三一節で「すべてのもの」を造られたことに用いられている。

四、枠組説―図式的日説

枠組説は、長期間説を採りながら、日―時代説が有している幾つかの問題点を克服しようとしてでてきたものである。この考えを簡単に紹介すると、創世記の著者モーセは、聖霊の監督のもとに、類似した事柄を集めてグループに分け、それらを六日間の様式の中に表わしたと考える。この説を裏付けるものとしては、創造の六日間を較べてみると、第一日と第四日、第二日と第五日、第三日と第六日の内容が、それぞれある程度類似、対応しているという事実である。^④このようなシンメトリーは、聖書の中に意外なほど多く見出すことができる。

枠組説もその主張する内容はいくつかの点で違ってはいるが、この立場の唱道者は、中世ではゲルソニデス、近世ではM・J・ラグランゲ、二十世紀ではA・ノルツェイ、N・H・リダボス、B・ラム、M・G・クライン、P・F・ペイン、J・A・トムソン、H・プロシエ等である。^⑤

B・ラムは、図式的日説を受け入れる理由を次のように述べる。

創世記が記された主要目的は、神学的、宗教的なものである。私たちは科学の領域に深入りし過ぎ、そのことを忘れてしまいがちである。この章句の神学的目的には、否定的な面と積極的な面とがある。否定的な面とは、偶像を禁止することである。被造物は創造されたものであって、礼拝の対象として相応しいものではない。創造の記事を正しく理解するならば、偶像礼拝は不可能な事柄である。積極的な面としては、この章句は、宇宙の始源は神にあることを教えている。そして、神が全能であり、霊なる方、神の知恵、神の善を壮大な方法で啓示しているのである。この事柄が、第二次原因への言及なしに、実に効果的に語られているのである。「神は言われ、その如くなつた」。このため

に注解者たちは、(1)創造の業には時間が含まれ得ない、と誤って理解してきた。宗教的意識は形而上学的なものであり、何が本源的なものであるかを知りたいと願う。時間的要因と因果的要因は、神の御旨が成るための道具であり、手段にしか過ぎない。それゆえに創造に関する神学的表現においては無視されたのである。

ラムは、このように主張した後で、日―時代説のある部分を否定する理由を次のように記す。

a もし創世記の創造の記録が神の創造を科学的に記したと考えるならば、その内容は不十分なものである。創造の記録には、生命あるもののすべての類型が記されていない。

b 教父時代から、創世記一章は厳密な意味で年代順に記されているのではなく、ある部分は主題的また論理的である、と考えられてきた。その最も顕著な例は、第四日目に造られた太陽、月、星の記事である。また、三日目に動物なしに植物が造られているが、今日の生物学によると、植物、動物、昆虫は自然の秩序に従って密接に関連し合っている。

c ヨームが時代を表わすかどうかという問題は未だに完全に解決されていない。この語には多くの用法があり、現時点においては、それが地質学において用いられている紀(period)、世(epoch)、時代(age)を意味していると拡大解釈してよいかどうかについては確信を持つことができない。^⑥

リダボスは、聖書の記者が史料編集を行う場合、年代順よりも主題的に行なう場合が多いことを強調する。その例として、第二列王記二―二三章と第二歴代誌三四章に記されたヨシヤの宗教改革の記事は、順序が異なっている。歴代誌ではヨシヤの第十二年に始った改革が、列王記では第十八年の律法の発見に続く出来事として記されている。メデビルはそれを次のように解説している。「列王記の著者は、一枚の絵画の中に、その治世の第十二年にヨシヤによって始められた宗教改革が、律法の発見によって(第十八年)さらに強力に取り上げられ、その後も間断なく続け

られたことを描き上げているのである。」新約聖書では、マタイ四章一一一節とルカ四章一一一三節に記されている荒野の誘惑の記事は、明らかにその順序が異っている。また福音書全体の記事を見ても、出来事が主題的に、人為的に配列されている場合が多い(例、ルカ四章一六―三〇節とマタイ一三章五三―五八節)。

こう述べた後でリダボスは、マタイ一章の系図に欠落部分があり、それは十四という数字を並べるための人工的配列に他ならないと指摘する。(他の例として創世二一章、出エ六章。) このように、聖書の史料編集においては、史料の人工的配列や区分は(それによって年代順序が破られる結果になることに對する明確な言及なしに)、現代の史料編集におけるそれよりは遙かに重要な役割を果しているのである。

リダボスは、彼が唱道する枠組説を次のように要約する。創世記一章において、靈感を受けた記者は創造の物語を私たちに提供しているが、しかし、創造の時にどのようなことが起ったかというのを正確に伝えているわけではない。神の八回の創造の業について語ることによって、著者は読者に対して、すべて存在するものは神によって創造されたということを教えているのである。この八回の創造の業を、彼は枠、すなわち、六日間の中に配列し、第七日を休息の日として加えたのである。(安息日が創造に依拠しているという思想は堅く保持しなければならない。)このような方法において、神は創造の業が完成したという事実を告げ、また、創造の御業の終りにあたって、神はその結果を喜ばれ、休まれたのである。また、安息日を祝うことによって、人は神を模倣する者となるのである。

彼は次のように結論する。枠組説は、創世記一章に關して納得のゆく積義を提供する。というのは、他の説の場合は、自然科学との關係で重大な困難をひき起すからである。確かに自然科学は、聖書をどのように解釈すべきであるとは要求してはいない。しかし、私たちが積義をする場合、自然科学の成果を無視してはならないと思う。^②

M・G・クラインはその論文 *Because It had not Rained* の中で、神の摂理による *modus operandi* (作用様式) が、創造の時も、現在働いている摂理と同じであったかどうかという問題をとり上げる。クラインは、「地には、まだ一本の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである」(創世二・一五)の章句を積義し、創造時における作用様式は現代と同じであったことを聖書が記していると考ええる。なぜなら木が成長するためには雨が必要であったからである。このゆえにクラインは、六日間創造説を拒けると同時に、同じ手法を用いて長期間説の主張をも拒ける。なぜなら、植物が成長するのに水を必要とするならば、当然太陽をも必要とするからである。^③

以上が枠組説を唱道する側の主張である。枠組説に對する反論もいくつかある。その第一は、枠組説が創造の順序を年代順ではなく主題的に解釈するという点である。第二は、二対のトリオのような枠組の型は、古代オリエントの文献には見られないという理由。第三には偉大なる創造の御業を六プラス一という枠組の中に入れてしまうことに對する卒直な疑問、そしてこのような枠組の中に入れることによって、創造の記事の歴史性を否定してしまっているのではないか、という反論等である。^④

これらの批判に對する反批判は、最近刊行されたブロンシェの *In the Beginning* (1984) によく記されているので、それを参考にするとよい。しかし筆者自身の感想としては、日一時代説と枠組説の主な相違点は、創造のわざの順序を年代順として認めるか、あるいは、靈感を受けた著者が主題別に記したことを認めるかの一点にかかっているように思われる。しかし、どちらが正しいかということを決する確実な証拠を聖書の中に見出すことはできない。二対のトリオのシンメトリーの解釈はそれほど重要ではないし、あまり強調することもできない。このことは二世紀前にヘルダーが主張したことであって、それ以前には別の対比が考えられており、現在でも別の意味を見出そうとする学者もいる。^⑤六プラス一という数字をあまり強調すれば、ノルツェイの誤りを犯すことになる。^⑥しかし、どの解釈の立

場を採ったとしても、神が六日（または六の時代）の間に世界を創造され、七日目に休まれたという事実は残るのであり、聖書全体の流れの中でこの六と七の数を神が用いられたことは、それなりに重要な意味があると思われる。

筆者が創世記一章の創造の日の解釈について少しばかり研究し、得た結論は、以上挙げた四つの解釈のどれが正しいかということを決定的に結論づけることは難しいということであった。これらの解釈は聖書の啓示を理解するための仮説であって、聖書を読む側の人間的な判断が多分に働いている。確かに、カイザーがのべたように「私たちの解釈は罪深く、誤りに陥りやすい人間の解釈にすぎない。」大切なことは、聖書は誤りなき神のことばであるという信仰に立って、より正しい、解釈を謙遜に求めてやまない信仰の情熱を生涯持ちつづけることである。³³⁾

注

- ① F. シェーファー「創世記」(いのちのことば社、一九八六年)八頁。同時にルターは、創世記一章は、簡單明瞭な言葉で記されているが、理解するのに非常に困難な書である、とも記している。さらに彼は、ヒェロニムスの言葉を引用し、ユダヤ人は三十才以下の者が本章句を読んだり、他の人間に注釈したりすることを禁じていると述べている。J. Pelican (ed.), *Luther's Works, Lectures on Genesis Vol. I*, (Saint Louis: Concordia, 1958), p. 3.
- ② M. J. Erickson, *Christian Theology* (Grand Rapids: Baker Book House, 1985), p. 367.
- ③ H. Blocher, *In the Beginning* Leicester: Inter-Varsity Press, 1984), pp. 39-59.
- ④ たとえば、字義的解釈の中に洪水説、理想的時点説が含まれる。断絶説でも六日間説と長期間説とがある。
- ⑤ W. カイザーは、一九七八年、ホーヤン大学で行われた創造の日の解釈に関するパネルディスカッションで、私たちが創世記一章の時間的要素に関して、最終知識に到達できないこと、また、私たちの解釈は罪深く、誤りに陥りやすい解釈にすぎないことを強調した。彼は謙遜を要請し、創造に関し異なる見解を持つ人々を尊敬するように勧告した。拙論「創世記一章の創造の日

- ⑥ の解釈について、皿梓組説「東京基督教短期大学論集」一七号、四〇頁。
- ⑦ F. Pieper, *Christian Dogmatics*, (1950) ; J. T. Mueller, *Christian Dogmatics*, (1950) ; H. C. Leupold, *Exposition of Genesis* (1970) ; H. Hoeksema, *Reformed Dogmatics*, (1966) ; L. Berkhof, *Systematic Theology* (1953) ; J. J. Davis, *Paradise to Prison*, (1970) ; J. Whitcomb and H. Morris, *The Genesis Flood* (1961) ; D. M. Patten, *The Biblical Flood and the Ice Epoch*, (1966).
- ⑧ その他洪水説の立場を採る者の文献は、拙論「創世記一章の創造の日の解釈について」II断絶説と長期間説「東京基督教短期大学論集」一五号(以下TCC論集、一五号、拙論とす)六〇頁を参照せよ。
- ⑨ E. J. Young, *Studies in Genesis One* (New Jersey: Presbyterian and Reformed Pub., 1979), p. 95.
- ⑩ Ibid., p. 470. ヤンがアールダースの説を引用するのは不適切である。アールダースは必ずしも字義的解釈の立場を採らない。アールダースによれば、創造の日とは、「神の一日」であり、創造の日の長さを計ろうというなどは「むだな骨折り」であるとも述べている。「輝く光の始まりと終わりの範囲がどの位長かったかについて、聖書は何も語っていない。」G. C. Aalders *Genesis*, Vol. I, (Grand Rapids: Zondervan, 1981), pp. 51-2. このようにアールダースの論とは関係なく、ヤンの主張に従って論を進める。
- ⑪ ジョン・C・ホイットクウム『地球の誕生』(聖書図書刊行会、一九八一年)三二―三三頁。
- ⑫ 前掲書、三三―三四頁参照。
- ⑬ 洪水地質学説が、すべての地質形成をノアの洪水に帰しているわけではない。ホイットクウムとモーリスは、六日間の創造の期間に、相当程度の地質形成が行われたとする。たとえば、カンブリア前の始生代に属する結晶状の岩石は構造的に複雑な性格を有するが、これらは第一日の光のエネルギーの衝撃に刺激され、物理的運動、化学反応が起って生じたもの。第三日に乾いた地が現われたが、これは最初の大造山運動を意味する。密度の重い物質は沈み、軽い物質は押し上げられ大陸が形成された。
- ⑭ J. C. Whitcomb and H. M. Morris, *The Genesis Flood* (Philadelphia: The Presbyterian and Reformed, 1972), pp. 228-30.
- ⑮ ホイットクウムとモーリスは、創世記一章に記された系図を文字通りに解釈する必要はないという理由を以下のように挙げる。(1)出エジプト記二二章四〇のような合計年数が記されていない。(2)カイナンの名がヘブル語の本文には記されていない(ルカ

- 三章三六)。(3)創世記五章と一章の系図は完全にシンメトリーの形をしており、十という数字は象徴的な数字である(マタイ一章の十四代と同じ)。(4)系図に記されているのは、十人づつの族長に関する情報であって、厳密な意味での系図ではない。(5)洪水後の族長たちの寿命とアブラハムの関係。文字通りにとった場合、ノアはアブラハムが五十才になるまで生きた。セム、ハム、ヤムテはアブラハムよりも長生きした。エセルはヤコブがメンポタミヤに到着した時よりもさらに二年生き延びたこととなる。(6)聖書はバベルの塔が遙かな昔の出来事であったことを暗示している。(7)メシヤの家系は初子ではない場合が多い。例、アブラハムの場合。(8)「生む」という語は、父子の関係ではなく、数代を飛び越している場合がある。モーセの父はアムラムではない。
- ⑬ キュヴィエはさらに「地球の表面での革命について、および、それによって動植物界に生じた変化についての研究」(一八二六年)を発刊し、人々に多大な影響を与えた。
- ⑭ Davis A. Young, *Christianity and the Age of the Earth* (Grand Rapids: Zondervan, 1982), p. 50.
- ⑮ 同上論集 一五号、拙論五一―五二頁。
- ⑯ G. H. Pember, *Earth's Earliest Ages and Their Connection with Modern Spiritualism and Theosophy* (New York: Fleming H. Revell, n. d.), p. 25.
- ⑰ *Ibid.*, pp. 27-8.
- ⑱ H・シーセン『組織神学』(聖書図書刊行会、一九六一年)二六九―七四頁参照。J・バクスター『旧約聖書全解』(いのちのこぼれ社、一九八三年)二二頁、H・リンゼイ『サタン』(いのちのこぼれ社、一九七五年)二二―七頁、E・ザウアー『世界の救いの黎明』(聖書図書刊行会、一九六三年)五〇―一頁。W・シヤムも同様の立場を採りながら、日に日については長期間説を採る。W. Shedd *Dogmatic Theology*, Vol. I (Grand Rapids: Zondervan, n. d.), pp. 474-7. 森山論氏も同様の立場を採る。『創世記研究』(荻窪栄光教会出版部、一九七九年)一五―一五頁。
- ⑲ 米田豊編『笹尾先生創世記講義』(ホーリネス教会出版部、一九三二年)三頁。
- ⑳ B. Ramm, *The Christian View of Science and Scripture* (Grand Rapids: Erdmans, 1955), p. 201.
シヤムは「六日間の創造の日を先立って非常に長い期間があったという教えは、教父やスコラ神学者たちの間では一般的な見解であった」といふ。Shedd, *Dogmatic Theology* p. 474. しかし、彼らが述べているのは、混沌があったとどういふことであ
- て、断絶―再建設と同じではない。アウグスチヌス『告白』十二卷第七章以降参照。なお、アウグスチヌスの次の書をも参照せよ。De Genesi ad litteram libri XII, IV, ch. 33; *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum*, XXVIII, Sec. III, Part I, p. 133.
- ㉑ John wäböhle 同いじは Young, *Studies in Genesis one*, pp. 33-38 を参照せよ。
- ㉒ A・G・ヴェルナー(一七四九―一八一七年)によれば、地球の歴史は熱球の冷却によって原始大洋から形成され、その大洋が土砂によって埋められ、減少してゆく過程であるといふ。
- ㉓ J・オアとA・ストロンクは有神的進化論を認める。
- ㉔アーチャー、ストットはアダム以前に人間が存在した可能性を認める。「私がアダムとエバを歴史的人物として受取ることは、直ちに、アダム以前に長い生物の歴史があった、その中には現代の生物学の分類でヒト科に属する生物があり、かなりの文化を持つようになっていたという仮説と矛盾するとは思われない……」『聖書理解のためのガイドブック』(聖書同盟、一九七四年)七八頁。
- ㉕ R. Newman and H. Eckelmann, *Genesis One and the Origin of the Earth* (Ill.: Inter-Varsity Press, 1977), pp. 61ff.
- ㉖ TCC論集 一五号、五九―六八頁参照。
- ㉗ 清水武夫「創造の日の解釈をめぐって」『基督神学』二号、二二―二四頁。
- ㉘ たんじは G. L. Archer, *A Survey of Old Testament Introduction* (Chicago: Moody Press, 1964), p. 179; R. Newman and H. Eckelmann, *Genesis One and the Origin of the Earth*, pp. 126ff.
- ㉙ ヤングはこの対応について批判しているが、それは論点がまわっているように思われる。枠組説がシンメトリーとどう時、もっと単純素朴なものを意味する。もちろん、ヤング自身、彼の『旧約聖書緒論』五七頁において、同じ図式を記し、対応があることを認めている。Studies in Genesis one, pp. 68-9.
- ㉚ たとえば、ノアの洪水の前後に記されている族長たちの十代、十代のリスト(五章と十一章)、また、十災のうちの九災について。拙著『出エジプト記』(新聖書注解、旧約)Ⅰ、Ⅱのこのことば社、一九八五年)三二〇―一頁参照。
- ㉛ Ramm *The Christian View of Science*, pp. 219-224.
- ㉜ TCC論集一七号、拙論 四―二二頁。

- ③③ N. H. Ridderbos, *Is there a Conflict between Genesis I and Natural Science?* trans. by J. Vriend (Grand Rapids: Erdmans, 1957). pp. 29ff.
- ③④ M. G. Kline, "Because It had Not Rained," *Westminster Theological Journal*, Vol. XX, No. 2 (May, 1958), 146-57. TCC論集一七号、拙論、四七一五〇頁参照
- ③⑤ 枠組説に対する批判は、清水武夫『創造の日の解釈をめぐって』二一八頁参照。
- ③⑥ Blocher, *In the Beginning*, pp. 51-3.
- ③⑦ ノルツェイは、六プラス一の枠組説を受け入れた者だけが創世記一章の安息日の思想の真価を認めることができると主張したが、これは明らかに行き過ぎである。TCC論集 一七号、四六一五二頁参照。
- ③⑧ 本論の詳細については、TCC論集第一四、一五、一七号、拙論を参照せよ。

(東教基督教短期大学・教授、和泉福音教会・牧師)